



墨水流燈會之記

西田
函

76
827



流

禮

禮



墨水流燈會記

序文ヲ撰テ隅田河乃古事哉揚ク

伊勢物語曰 勿得由也... 武苑と下流の國との中に... 伊勢... 河あり... 其川の... 思ひ... 限... 渡... 船... 目... 人... 水... 業平



此考... 墨水流燈會記... 業平

古今集より出せり相おかりはら子馬子次

水源を尋るに甲信の二州と新の國を登り秋父の詠流と合し
中津川といふ標沃男余を東流し大里郡中熊谷と云
分流は是れ荒川と云一流標見比企入岡新堅足と云
互りて是れ島島飾の中を流る子信といふ未き浅草川
中川と云信濃川の支流流るを古隅田川と云

萬葉集、角太、河、新日記、あま川、東鑑、

隅田名

すみだ川をよめる

古歌 新 夜

新撰集

五葉集

新撰集

新撰古今集

史本集

同

北國記

同

同

武蔵記

真古山夕城之真、庵葺のす、た川あり、むらうらむ、
新撰集、
年暮法沙

事、向、下、と、え、ぬ、存、の、隅、田、河、を、た、の、友、と、り、
後、修、院、
典、内、侍

角田河在り、夕暮、
俊成、々

此世も、
後、原、
陪、祐

愛、
九、條、
内、大、臣

夕、
純、
兼

浪、
亮、
忠

秋、
道、
具、准、后

三、
北、
條、氏、康

新、
北、
條、氏、康

東國行

社ふぬ指の花も沙草は清伊流きよも陽田川に花

宗牧

芳泉集

婦もさしきこころの思田川に思ふてあはれあはれ流らん

光康

廣徳詣の歌

すみず川にさしけりも今こころみせうきけり花阿世をる見

光俊親王

松尾集

見よ見よ松尾柳の志すのこころを後南田河原に

康道公

建保名所百首

今宵も誰か宿らん廣き宿すも川原の秋の夜の月

順徳院

新後移遷集

我々たれもさしきおぬ葉崎の陽田河原を宿すはし

尚長

秋風集

生乳山夕城ゆけハ風をすすも河原を宿すも川原

季廣

中道の道記

是をよ東路遠く思ひけり角太川に流るる水

長嘯

名もいふもいふの都を宿すも川原を宿すも川原

信幸

山をさしき宿すも川原を宿すも川原

おの

歌

東の東は山にさしき宿すも川原を宿すも川原

全

角田川にさしき宿すも川原を宿すも川原

為久

花島に宿すも川原を宿すも川原

おの

初宿すも川原を宿すも川原

同

伊東の宿すも川原を宿すも川原

頼胤

咲も宿すも川原を宿すも川原

おの

筑波の宿すも川原を宿すも川原

菅村

陽田河原の宿すも川原を宿すも川原

孝仁親王

すき川に宿すも川原を宿すも川原

戸田

角田川に宿すも川原を宿すも川原

上野

高し〜五月河原を經由す身なるは昔の海人 季純
湯のふき所伐し〜陽田川をよみ〜名は春をたぬ〜 寄
少人少事なる〜南田河原もあき〜地獄多武 全
唐寄のす〜五月のふ〜里に春をよ〜 燈 月
陽田の原に宮屋の宿り多〜陽田川系にぬ〜 道見親王

夏天波静角田川 掉子蕩樂泛盡船 當時業平遺愛
地風流千歳至今傳 二品良尚親王

此外も紀考より〜訪より〜に條多取造り〜在る〜

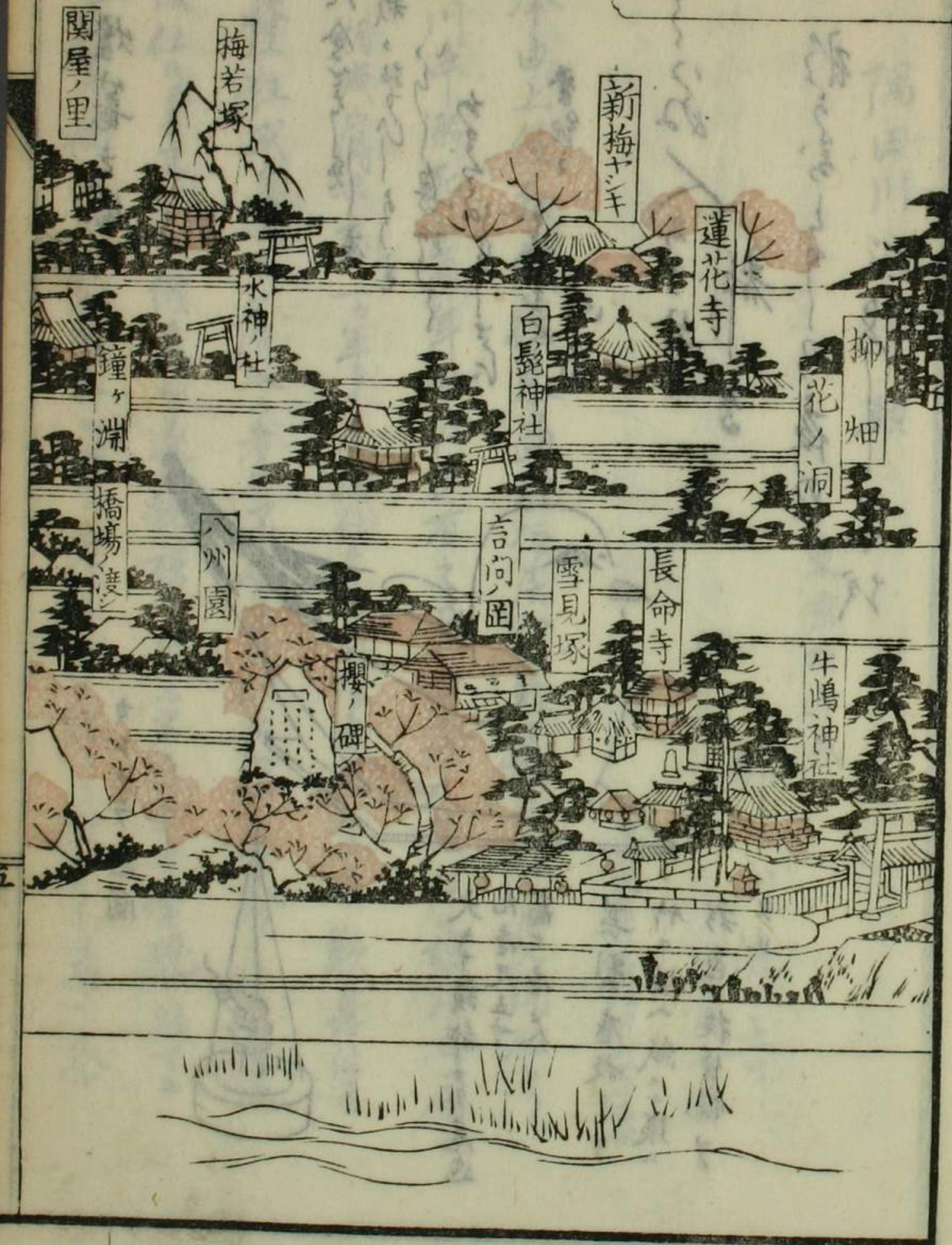
墨水 四時乃志を架

六月	五月	四月	三月	二月	一月
中旬	廿八日 毎云	上旬 十五日 十七日	中旬 下旬	中旬 初午	元日 初卯日 子日
花音節 長海毛節 水鶴	花音節 杜若 言簡祠祭	梅祭 梅祭 東照宮	野梅桃 白魚細 小納戸	梅花 梅祭 三圍祭	柳島見京 龜戸妙義社 小松茂
十二月	十一月	十月	九月	八月	七月
下旬	廿日 廿七日	下旬 十二日	下旬 十五日	名月	中旬 下旬
早橋 山茶花	秋葉法火祭 子鳥 其爾志	紅葉 本島引	秋七草 蓮 丹頂池	流地會 秋 飛戸 花名友	後徹合歡花 流地會 納保
松野 總年會 八百松 植平	雲見 八百松 植平	紅葉法火祭 子鳥 其爾志	秋七草 蓮 丹頂池	流地會 秋 飛戸 花名友	後徹合歡花 流地會 納保

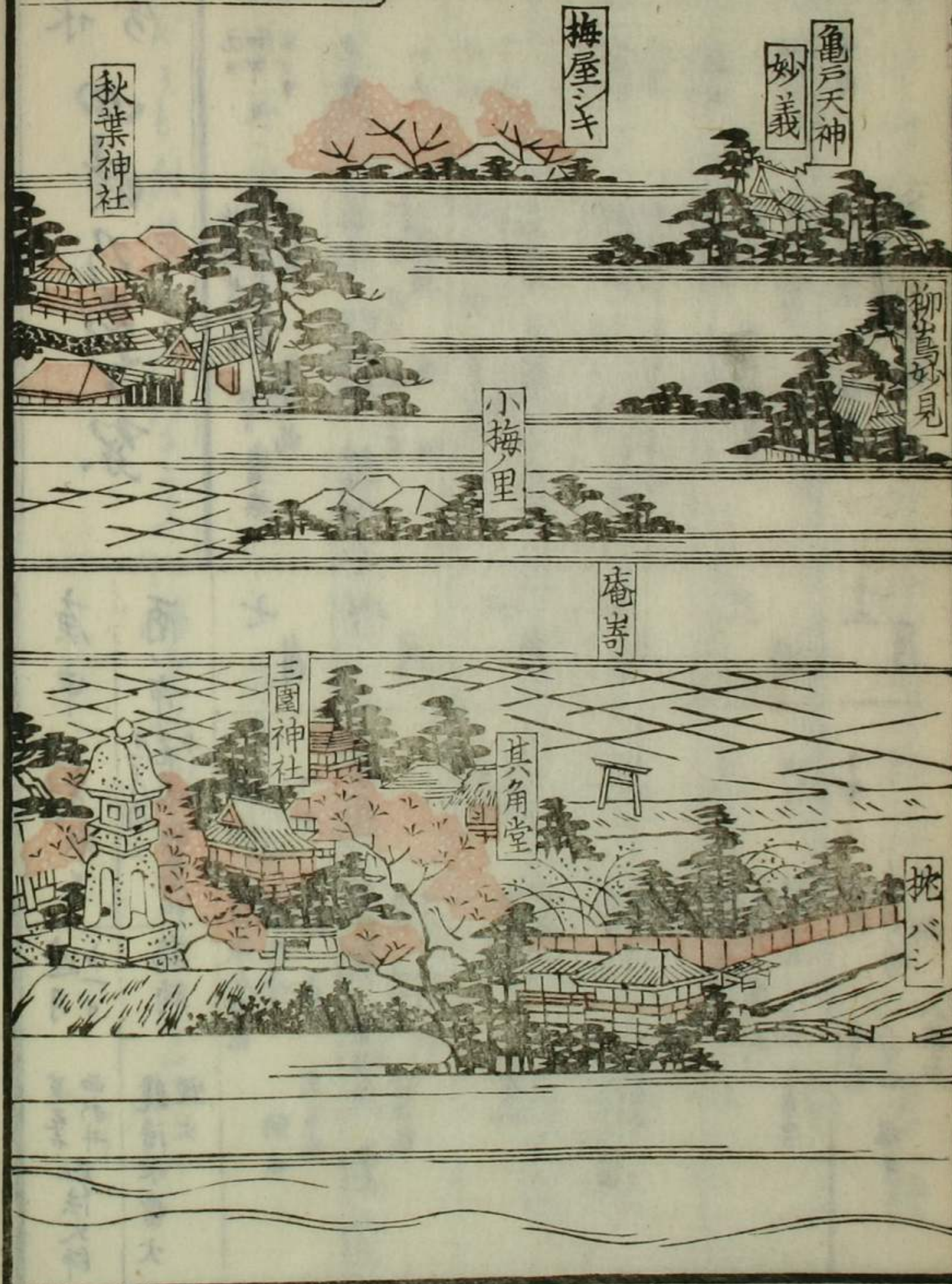
庚申 紫又村 帝親天
連月 蓮花寺 弘法大師
廿一日 西新井 龍清水雷火

酉市 花又村 龍島神社
臨時 煙火

所案所



名堤墨



都鳥燈籠之圖

カンテラ之圖

依燈舎をてりて夜

我、神のいしりも

いり、真のいり

あまのいり

養子

いりてん

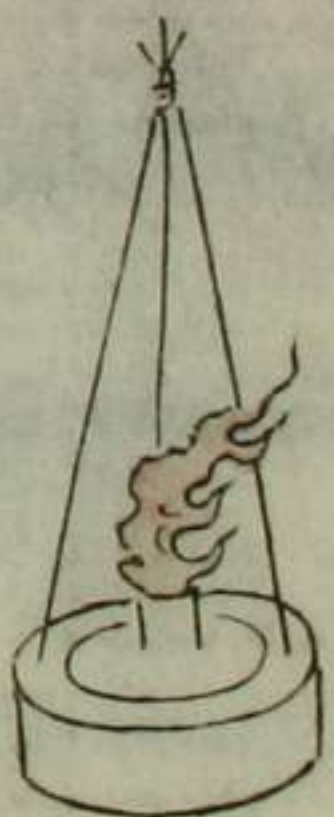
晴南

いりてん人

都鳥

新うらなひの夜の

七草



大きサ頭部より尾迄

凡七尺五寸

高十尺

其製底板ニシテ

竹ヲ植ヘ紙ニテ張ル

彩色ノ後生帳ヲ

又ル

隅田川流燈願

東京府平民

外山佐吉

六十年七月

第十大区小區須崎村西四番地

右奉申上候私儀從來当村住居罷在是迄往々見聞仕り、
隅田川中溺死之者年々許多有之在処方今人民保護被為届
此害相滅少為共来々一年々屈指仕り、此症其度毎歎息仕り
右を發狂或も過而落入り者不幸無此上銘、生命之貴重成
自護仕りも不測之終焉を遂親族者も不存也靈魂之帰する
所不可實憫慈之至爰一遍々老婆心を記し彼等為、祭

祀念年頃有之此生業之忙志也... 牛嶋弘福寺
 而每七月中水燈會之古唱依此致此迎來廢統仕是也陽田川
 一景之內而舊慣也... 遊客其觀也... 尚不
 至者不少暗之地之間... 古に似り水燈
 相流溺死人之供養... 水燈を點火の上流に
 總之五七間は消滅致す... 有之
 左の如く到店... 懸念... 別紙圖面を通
 着船... 運繩仕火... 妨其他... 害を
 原... 七月一日より... 毎夜八時より十時
 庵... 杜之内... 何卒出格

御仁恤... 御... 此段... 也

明治十年五月廿日

右 外山佐吉印

大警視川路利良殿

前書... 通... 加印... 也

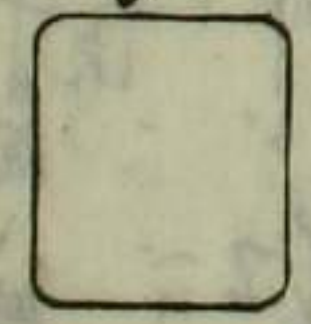
右... 望月陽吉印

朱書

書面願... 趣... 事

明治十年五月廿七日

大警視川路利良



散會

墨水流燈會

七月一日より昨夜午前八時より
 五時十時を消燈

曲水一盞を流せ。風雅を志し、國性を
 示し、紅を流し、
 一都府の形、燈籠を流し、此川の水鬼が迷
 了、國路を尋ね、
 一樹乃陰の因、一河子數地を
 流し、清き光を流し、
 物言ひ、秋言ひ、伊達を更
 須の夕暮り、納涼か、
 遊覧か、
 報せ

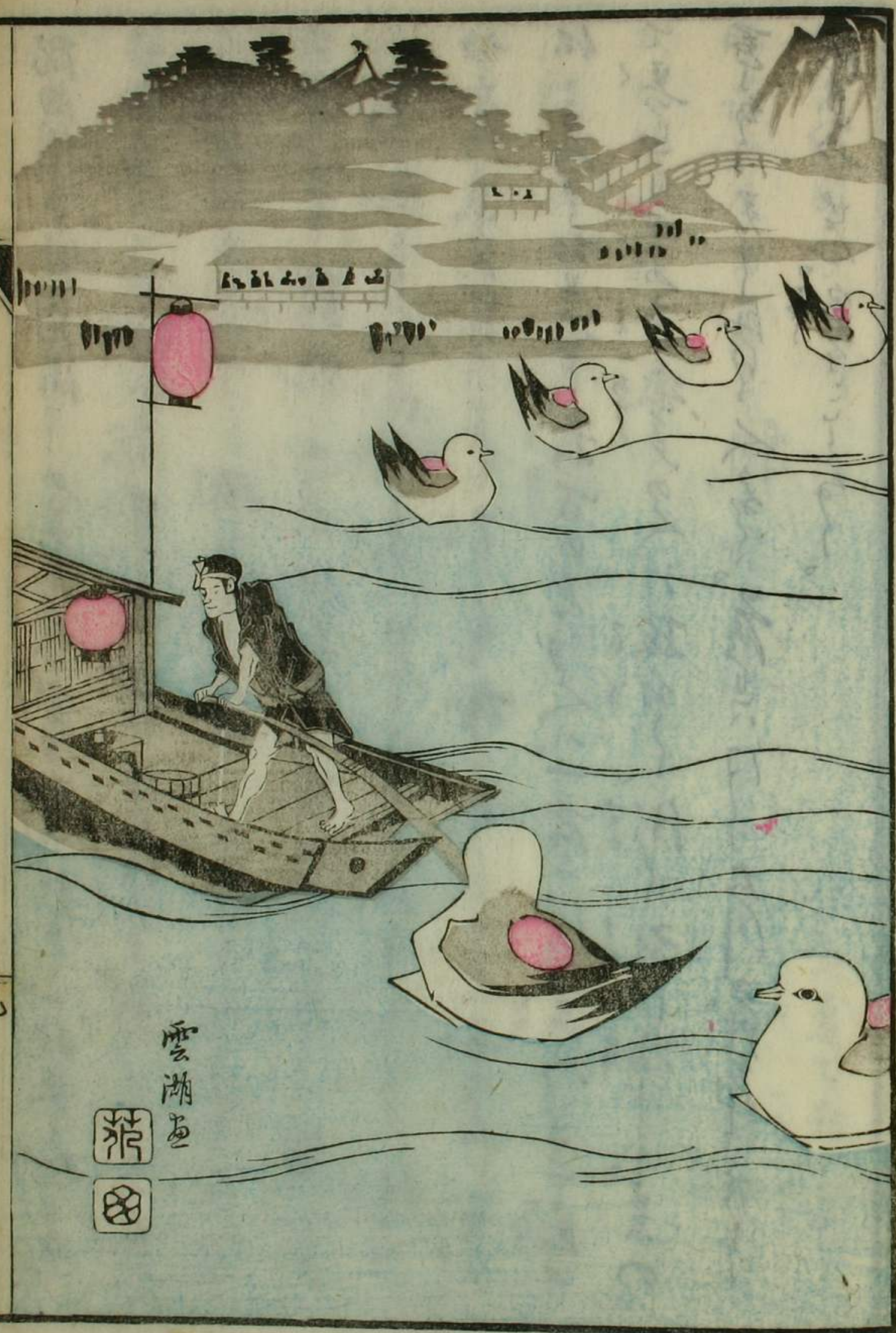
墨流燈會の墨子 余記 杜依老人致白

各社新聞紙大同小異、其二三紙掲ぐ

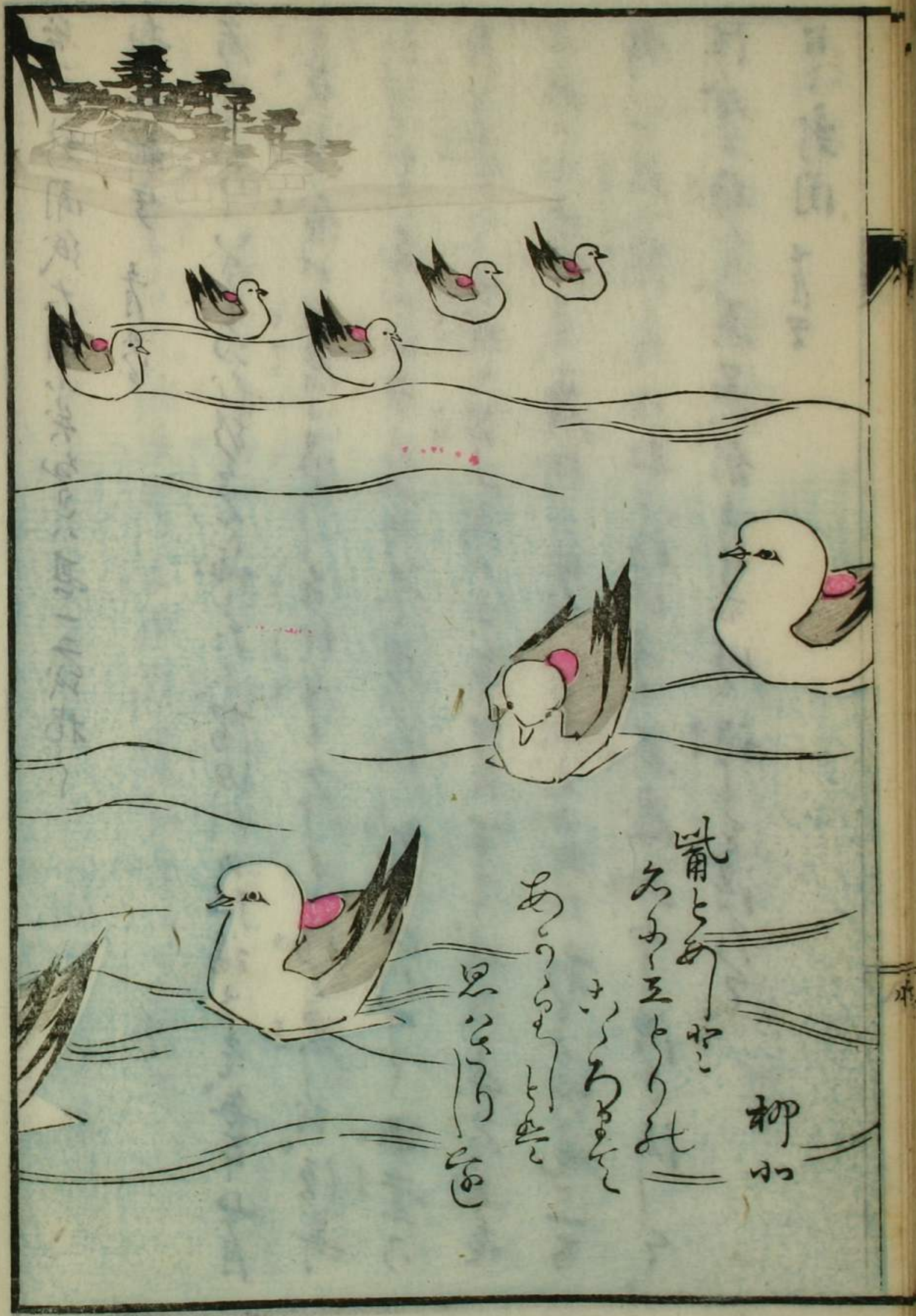
報知新聞 青史

若し、おととし、
 干菜盆會、
 以て、
 死を、
 以て、
 十時、
 候し、
 法會、
 日、新聞

七月四日



雲湖



柳水
 菖蒲とあやうき
 名もあやうき
 あつらふも
 思ふは

水

陽田川の煙籠流しは是物人の客子駭及敷き一時夜も例も通
此屋の後の傍の川岸に架けた棧敷子我りどる満
しそ今も流は来り候居たるに願うと流すり候也是も火籠を
具を穿り籠籠と云ふも斯おん籠籠の不知をハハ海なら
うをい何人も人を押分てあし歩んとしゆく柳子総り縄の
切せたり事むりり候て若くは棧敷子トサレ候居候も
何れもつちまふも若百の尺物人ハ一度子川へ落入り申さし
て是もて叫が声多の人は懸け候し流し候し揚し候し是の
事あり若くは候人候り候居候し大川の煙籠流しなり
流しやせん客子候し候り。

假名遣新抄 七月十日

何東專之報

昨來社中名を名を例の煙籠流し遊居も大層候陸歩好の
大川爲山岳候し是中一筆流し候し候し揚し候し是の
流籠は目的子舟川中に出る流愛高岸を願し目乃居候
わくし人候ぬは候。是ハ此煙籠の降流をま者具流を
後流の方ハ數十の點を赫し候て籠籠の沖にありし彼の
不知火と候し候。見返り候し候し揚し候し候し是の
流籠をたも客子候し候し音樂をま候し候し一般の家根船
下り候し是も信濃の道守沙あり候し候し一連の流籠
候し候し流し候し候し。次の一連ハ十候のり候し候し。

其順序遠くを迫りて。方々走り。園く遊了。一陣の風
り。廻るあれ。中庭を中流り。あつて。牛屋の原木。あつて
止れ。時り。解して。石。漢。は。あ。根。あ。り。荷。定。り。あ。根
の内。清。水。を。奏。せ。し。雅。客。あ。れ。い。三。下。り。の。ス。ツ。チ。ま。の。俗。物
り。荷。足。の。樂。こ。ハ。牛。島。の。兄。様。成。を。近。邊。の。工。人。を。七
八百。松。の。二。階。五。尺。茶。院。の。如。く。こ。ま。彩。之。の。上。等。指。を。流。燈
の。案。息。王。擁。も。清。く。た。る。貞。算。公。り。ち。庭。あ。ら。お。も。枚。子。の。橋。上
の。鶴。の。歴。々。色。情。悲。し。く。て。啼。あり。三。國。の。向。上。紙。點。を。ほ。の
啼。く。總。子。二。法。の。系。合。船。を。問。者。ハ。湯。橋。を。証。め。て。及。び。ぬ
を。嘆。ト。提。乃。掛。茶。屋。ハ。軒。せ。列。ぬ。去。後。者。之。の。離。留。を。

梅元再び盛る。あやまれ。箱了。実根。松が。驚く。初。は。梅。屋。の。羽。生。
て。赤。く。梅。屋。の。石。あ。ら。か。と。手。の。赤。梅。ぬ。ハ。牛。島。梅。が。好。梅。屋。斗
角。亭。の。上。戸。客。言。向。乃。ち。戸。を。空。板。の。身。ハ。三。輪。着。着。表。の。雜。院。
然。ち。提。上。り。具。際。せ。ば。ま。一。層。の。光。景。あり。と。不。仕。後。の。人
押。合。て。合。系。の。く。力。車。本。母。ち。の。方。一。行。ハ。園。を。たり。正。海。り。込。
おう。山。梅。の。五。條。快。節。あ。ら。別。川。も。陸。も。花。見。以。来。の
賑。ひ。で。あ。ら。し。い。

登樓流連記

萩原乙彦誌

今日一日。風角を除くの外。毎求。角田川。瀨。死。供。養。の。流。燈
會。の。と。新。若。系。も。不。給。院。花。を。手。茶。屋。の。權。揚。げ。以。て

亡媧玉氣、追言まき、暮水の流すりの強、鐵鬼を以て
名とす。其、実ハ、幼子の餘具あり、將に御、玉氣を所の、陽の
追言、流すも、陰、怒、瀾を誘ふや、以事、也、鬼の、子、玉、を
――人の、為、まき、水、流、朝、野、新聞、の、邊、上、先、生、留、る、の、雜、録
中、既、言、ひ、き、史、陸、賈、子、月、牘、を、以、酒、食、可、也、地、出、く
時、ハ、鏡、鏡、を、得、る、と、柳、美、女、の、流、花、ハ、海、ノ、舟、子、多、ク、遊、王、下
秋、也、龍、膏、の、如、く、地、ノ、大、美、子、流、ま、ま、遠、く、三、途、川、ノ
邊、を、ま、ま、か、を、知、も、花、街、の、燈、籠、も、亡、玉、氣、を、來、る、夜、可、南
の、先、令、ハ、あ、か、く、亡、媧、の、靈、魂、を、何、を、厭、離、釋、去、所、と、述、ぶ、を
湯、也、〔也、事、角、則、也、〕 在、京、が、何、く、何、也、ハ、家、ノ、言、也、南、世、に、大

屋、也、及、金、櫛、流、の、居、候、火、宅、を、何、羅、を、燃、さ、候、雪、降、氷、燈、の、以、身、
水、を、け、て、鏡、を、看、く、如、き、天、竺、の、高、工、が、ま、ま、人、工、に、精、製、彼、乃、法、蘭
何、く、磨、と、し、掲、げ、一、萬、燈、籠、と、し、之、の、合、貨、子、反、射、を、銀、燭、乃
光、輝、ハ、雪、花、一、夜、の、春、子、消、滅、疾、を、目、の、表、を、電、光、石、と、し、
同、一、般、の、歡、ぶ、ん、友、人、對、梅、字、前、夜、墨、院、の、吟、詠、也、
世、を、氷、り、何、を、連、火、宅、以、み、や、去、來、經
繪、入、新、聞 七月、十、日 新、富、在、一、息、乃、也、
二、三、百、前、ハ、新、富、在、此、相、言、作者、林、榮、進、こ、ま、之、彼、の、言、の、
は、終、と、思、ひ、月、樂、屋、内、一、面、の、浪、幕、を、看、ま、新、く、流、燈、會、
記、也、山、さ、か、鳥、生、控、好、を、建、向、の、床、の、ま、ま、遊、病、の、春、也

也の程舟を掛け、花酒を秋乃七叶をちよみ投入とのぞ。
向島と見え暮極向で板大切の市此事一の場まで舞臺へ
尾斯の點つのを本國のお雛子の音楽を伴約りて、数百の
都をとりて入る。彼の波まのよ引出たる。調子に強絶
能うさう。管業中、他出の出来ぬ俳優連が大うけを
あつといふ。

其角堂社中向集摺物

秋さしし深むさ新ちすさ川 定馬
浪やう子蛇舞流せし盆遊心 五休
こころ陽田乃夜露の都鳥 大馬

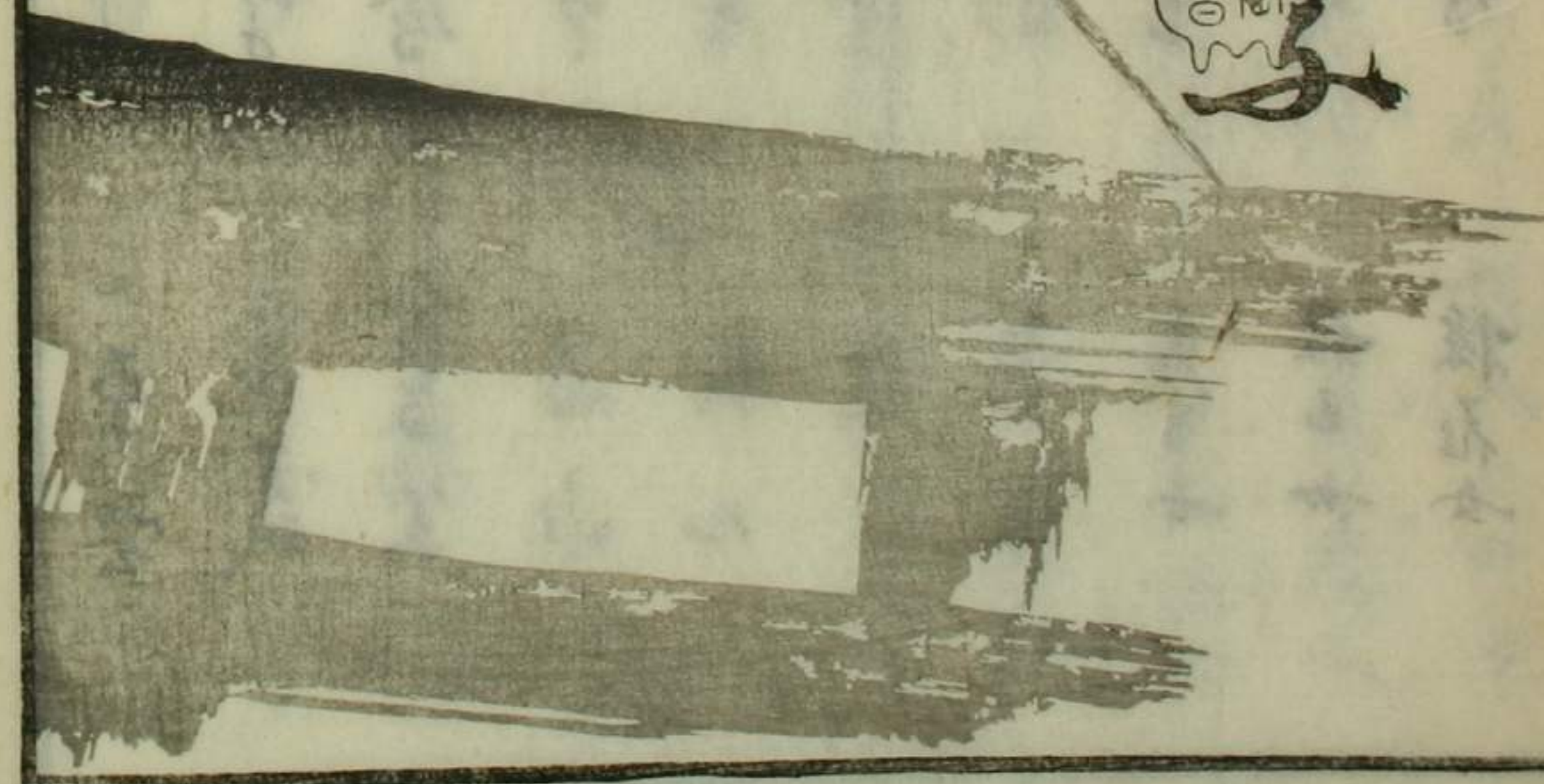
水蛇會 燃やわしのあきさう柳 市雲
流燈會 秋の夜う移り 多字 正義
夜景をより夏試まよる水蛇會 苔笠
秋深きさしや 法乃さしこさ 雨水
雪をふく風は足さるる多燈會 小橋 對兒
やあ系美ハ水に流るりし流燈會 葵
地ゆきてあさまき系 蛇龜く柳 是之
宵毎子度も流るる水蛇會 長身女
月影ハ水に流るる流燈會 枝玉女
西落沙き空よりさしや 燈會 孫花女

田をみありの
神ありませ



花の地

いも豆の家



燎源一不知其所以 都鳥 梅成

わきまのやうに陽田の川流鏡鬼 素直

多う時 其書ありあり 流燈會 永梅

親流燈記

澤上漁史

我澤上村流の。吾男子善女人。後使ハ後使ハ罵罵の果陸を以マ
お謀り曰。年々歳々此澤川十里乃流道に溺也。阿もや屈原
李白の才子と句。河伯の管轄を唱ふは幾千百人タカト達 豈
氣毒 手あやむ布。我々 寧ろ金銭 醜。夜々流燈供養の
大典を流り。以て冥路を照し。彼の冤鬼を慰めん。如何と
店談一決。其酒樓茶肆の主人 鬼も。亦も。居力。村妓某。皆

弟く胎嬰殞の跡を擲ち。決意應教談 敷子の流燈を造ふ其如くハ

酔つて。其後、紙あり。その巻を本りて。肉を流燈蓋を。あや。寧ろ

七月一日の夜を以て。閑業(夏)始。此大慈悲大功德の盛典を

行ハ蓋。一風向の外ハ。水商断。あや。澤上。一夕あむ。乃

於風先々。水橋。晝まで。水を流。夜も。八時。な。此

舫二三隻。其燈載せ上流より来る。長布の北。百歩斗水亦

於。群徒を水と初。其光。閃々。お映。潮子。何を

下。風亦。随々。一上一下。陸續。東橋。子。此。道。此

此を。少。以。其。螢火。を。景。花。宮。の。池。子。初。り。女。し。

是を。大。由。吟。を。ハ。百。艘。の。大。船。を。赤。磔。の。戦。子。用。いた。す。に。

亦系澤より一奇觀あり。澤上子覺つて、南無阿弥陀佛と唱へ、
南無妙法蓮花經と叫び、今も水窟より多くの冤鬼の泣き
より、以大供養を歡喜踊躍して、沙羅木を唱へ、思ふ速くは
出さぬ。先女上を見送せ、散髪あり、野市にあり、坊主に
行り、これより交申す。高田を以て、丸盤を以て、度人まげせりて、
而して若く、舟も糸色で、若く蓮の葉を造り、ものも蹄
視せし、多儀立派の屋根船なり。又陸上を見つせ、両岸乃
橋上子、房齋あり、陸鼻あり、白面あり、朱唇あり、陸上子
并み欄干に倚り、おまゝ出現せ、彼等ハ定先、腰を下り、
まゝ、両眼を刮り、これを望む、皆造り、手高脚あり、慈心

水陸の鬼も皆傾けたる氣あり、樂心を見せ、則ち言ふ、此供養
の爲も、素夜の苦惱を脱離して、極樂浄土を生じ、我々の一同
も満足せよ、おまゝ信じて、是を於て、澤上子も強く、感涙神をうやむ
我材内の苦男女が、結核五種の思ひ付を深く彌誓したるに、
既し、金龍山の清聲、佛々として、十一時を轉せ、彼の水陸乃
冤鬼ハ、空よりドロンと消滅し、了らぬ思ひに、たのむて、おま
船を走せ、陸上車を履い、一舟子何處へ、帰り去り、杵彼亦
ハ、真子鬼那、持し人那、若く其人あり、流籠の信長を
も、鬼の爲も水窟より、人の爲もす多那、或も苦男女の自ら
爲すす多那、是故、秋風先生、信長も、先生曰、子も、例の

悪癖を以て世の穴を扶ぐ。必しも苦男女の嘆りて遭ん
と。乃日願未多記して江湖の同癖子尔。一障く氷決と信
周く於爾 芽七十号

墨水流都島。見物人多通。點燈非施鬼。為
金銀流通。

開化と一と影。此流ありを其為逸と云 若く柳
流を地籠り浮名もろくと申す。酌の二足連

小唄 清元茶番太夫新節

於多たつてまの九地巻乃よあく風の吹く舟波如
修瀬の水流く心ささくはうあまふ

観流燈記 卷二

澤上子侍を觀の後七日。一友來り流に曰僕流燈を一觀せん
と云。吾子為。東道せ。澤上子曰。遂然おま僕。既子看。館を
流。安流の幽靈子。接き成樂。友。固く流。て止。り
乃ちやむを得ず。水橋子。空。て觀。其。光。景。紺。白。と。一。般。
唯。燈。教。の。滅。したる。の。善。し。日。曜。の。あ。夕。必。し。燈。教。極。く。多。
是。幽。靈。の。汎。山。出。る。為。ら。幽。冥。世。界。ま。ま。休。服。あ。る。可。笑。
り。是。澤。上。子。面。白。く。も。何。も。し。無。き。故。に。水。欄。子。倚。り。望。み。以。望。勝。也。
一。聲。鬼。あり。突。然。來。る。面。白。子。跳。躍。して。曰。此。澤。翁。汝。何。を。饒。舌。
の。甚。し。常。に。人。を。嘲。罵。する。の。事。を。係。り。思。を。嘲。罵。す。以。て。名。を。さ

不の朝野新多雜録欄内より。教く日本全國に播き。これを謹む
もの。家子家人ある代々も我鬼族の醜恥爲り。大をいし且油
を男女。主と主水も溺るの鬼の爲子。此修養を爲すと思ひ。喋く
舌を鼓せ。是實に大謬誤速く。正誤せよ。又天下の溺鬼何ぞ
濯水は同んや。酒食も溺る者有り。賄賂も溺る者あり。娼婦
あはれ。淫婦も溺る。穢業にたはるるもの。何ぞ茶も溺る。酒も量
に溺る。然るも月給も溺ると。然るも馬も溺る。而して其本心を
失い昏迷して。此水を知りて安んず。己の肝要を穢業を失
面目より恥ぢる。あはれや。安んず。國を安んず。安全堅固なり。
此の念あるや。安んず。我民を安んず。天興の權利を占有す。

めんするは素あはれ。是も溺鬼なり。故に長く耳を。流終の修養を
出現す。物に汝は水も溺る。鬼族なり。看做。何ぞ鬼の水
中より出ず。水中に溺らざるを修む。高き。甚。且此新字社の
火も毒なり。何ぞ懼く。探訪者の爲に可成り。不を爲す。属する
我等の惨状。あはれ。淫も子。大災。を曰。鬼族を休めよ。
此水も火あり。此水も何ぞ属する。此探訪者を得ん。芽
二記を修む。

聖徳太子

夕風は波は清く。あはれ。此の源。此を都を申す。此
此の青。此の雅樂の書。此の川。夜の行。此の乃

流籠會

多岐若狭人多く功やまらざる
若狭若狭人多く功やまらざる

流籠乃中世の緑の糸 旗仇た子や

若狭乃中世の青毛淀一月の琴 隅田子

里々燈會

全盛遊

是等尚時新若狭仁和賀に在りて流籠會の

流籠乃中世の常盤津を 是代の進福子殿に 新津宿に用申すに 歌を言はせ

南田川の燈籠流 都島流廊飼

仲乃街燈籠會 学校前 小塚中 女生徒 小左衛門 中 小雛

飛来 さん みた 女舟 小いん小流

進福 上句ハ十七文字 下句ハ七七文字 卅一文字 和言葉

河外具本を初述 常盤津文中曲節

名所 おのゝとん 歌を 在乃君の詠に 其言の系 我若狭

人若狭の松梅ぬ 松の文の若狭よく 今も一字に 廣縁や狭く

上句の七文字 下句の七文字 卅一文字 和言葉

若狭の山梅川 流れ 流籠を 流籠の 流籠の 流籠の

長命寺 若狭の 山梅の 流籠の 流籠の 流籠の

外のおゆも 若狭の 山梅の 流籠の 流籠の 流籠の

鬼の子 拍のお系子 車きり せ 木舟き 地を 又鳥 上潮

上句の七文字 下句の七文字 卅一文字 和言葉

南吹くところ 宿波 北風 申すまゝ 傷を束ねてはく 春雨より 波
 聞るも 春をゆく 浪田の 吉田より 三ノ 里の 岸より 河の 結成の
 合款も 紫をたむ 夕神 遊川 岸より 水とを 遠くのを 水神の 社成
 流成 會を 待 新山 川 岸より 水とを 遠くのを 水神の 社成
 た 外に 遊 水子 移り 新 紫を 水とを 遠くのを 水神の 社成
 結成も 流成 川 岸より 水とを 遠くのを 水神の 社成
 古法 角田 河 川 岸より 水とを 遠くのを 水神の 社成
 桑の 腋 局 あり 水とを 遠くのを 水神の 社成
 以 水とを 遠くのを 水神の 社成
 雪見の 寒の 飛 者 連 々 水とを 遠くのを 水神の 社成

水子 流成 の ら 氣 づ け 初 手 の 浪 成 川 岸 水 子 流 成
 若 志 乃 志 金 局 の ら 水 子 流 成 川 岸 水 子 流 成
 水 子 流 成 川 岸 水 子 流 成 川 岸 水 子 流 成
 の 水 子 流 成 川 岸 水 子 流 成 川 岸 水 子 流 成
 水 子 流 成 川 岸 水 子 流 成 川 岸 水 子 流 成

観流燈記

第三

漢 孝 流 成 を 観 之 記 再 二 乃 西 日 爾 末 夜 燈 教 訓
 坊 観 客 者 陸 續 々 々 水 子 流 成 川 岸 水 子 流 成
 村 人 某 一 夕 漢 孝 流 成 水 子 流 成 川 岸 水 子 流 成
 湯 飲 水 一 杯 漢 孝 流 成 水 子 流 成 川 岸 水 子 流 成



舟のり



舟のり
 舟のり
 舟のり
 舟のり
 舟のり
 舟のり
 舟のり

家隆

子遇ふ毎に長擲するの事。貴く在り。葉麻を漬きしことありし
又當り。一又は幾の貸借を在り。今夕何の爲に斯く塵穢を棄てり。
余甚しく憂ふ。村人曰。公修むを休む。僕亦亦得て流能を在り。公
一村の利益たんとを祈り。我も亦下座く。今日駭し
著く。報し。傳し告。終るに富の報客の甚く。今夕何の爲に。我は老翁。
此れ公忽ち之を記して。例の罵詈雑言を極め。以て江流に敷通す。
僕等至時。尚く其公乃惡言を極り。我れ之を極事。局に祈す。
五七圓の罰金を出せ。めり。我れ何ぞ同く。彼の罵詈
ハ俄に流能の光彩を席へ。士女あり。觀者。日。折り。竟に僕も之を
望み。の幸福。と。有。り。め。た。る。富。を。慕。は。ん。を。喜。ぶ。擲。し。公。の。為。り。

一様を罵く之故。謝せざるを得ぬや。皆修し。然るに或は徒に
報し。或は吾流に敵を。歡呼舞踏して。漢子よ。白ひ。其。を。上。系。
漢子之意。即のそ尾。擲者。心。中。得。有。り。後。に。隨。其。人。
た。り。多。く。擲。け。右。多。く。其。痛。を。擲。け。喋。り。流。能。に。曰。は。り。位。
減。る。に。擲。け。又。是。れ。新。字。記者。う。神。通。力。以。り。能。者。其。人。小。梅。の。
其。の。事。を。采。り。ま。も。茶。一。筆。以。り。各。位。の。魚。を。擲。け。今。又。
流能の鵝。や。も。相。傷。風。風。し。一。般。の。光。榮。を。擲。せ。り。め。た。る。
おの。後。来。余。を。遇。せ。り。こ。し。一。言。新。田。の。太。中。を。擲。む。辭。
う。了。了。以。り。擲。極。の。八。五。中。哥。う。う。り。大。物。を。擲。け。村。人。
皆。唯。唯。と。言。り。一。少。年。遠。く。吾。を。属。し。同。曰。公。を。

元来流體乃何の爲に他りしと知れ。漢孝曰。其滿冠を帯て
有るがらん。少年曰吾く。秋村人愚ありと稱し。室鬼のたけり
後せしむるや。曰嘗て家子多くの體を以て出をる者なり。流體の
後け既し二旬に過し。而て其月の成り遊ゆや。夜に歳百改を
知れ。公何ぞ接訪の跡をわ。漢孝曰。嗚呼とて嘆じてい
尊文老人。既に體の爲に信春令。我れ爲る。秋村人傳
體の秘生人會を。新しきことたれり。其三記を他ふ。
からさみ新聞 七月十日

朝野新聞 八月三日

陽田川の花陸大法會。其間後四時より始。其極極ハ。法會の
中流に流儀見極を。是極上寺の大教正初め。早録人の
高僧方。形如二艘して押出。法會を修。別に屋敷に
二艘。樂人を集て。雅樂演奏。流體ハ。火を懸。凡そ
此法會。夜に。懸燈。其より事。施をより。増上寺の依
形を。流る。大寺の言僧を。施物。及ぶ。極上の
供物を。流る。流る。赤高。皆亦。持
是。大。施。秋。定。成。其
は。南。大。其

人に出る

月と燈籠池

才一号

外合

流燈會

源編の巻端

とう

言同

流燈會代是

灯籠池花流燈會に燈籠池の光

こころに代は今に都をたもては光の中

其の光のたれを照らすの光をよ夜の光

光の子をたれを照らすの光をよ夜の光

此より一歩とよむたはまら

灯とせよ一歩とよむたはまら

富士山麓原に暮る流燈會

燈籠池に付く流燈會の光をよ夜の光

花の光を流燈會に照らす

流燈會の光をよ夜の光

今様

源國正流

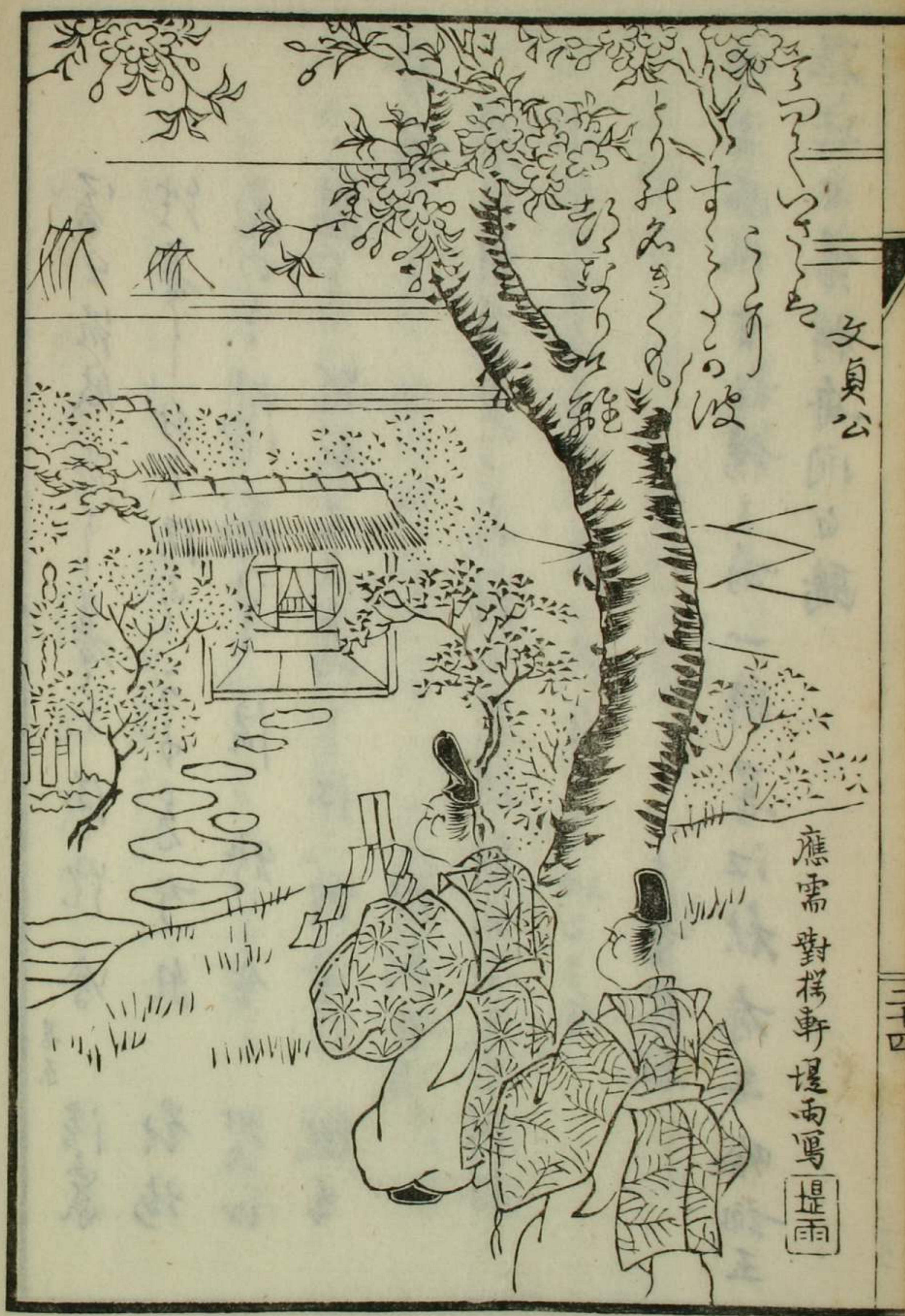
春の朝乃さく花の夕は紅糸もよ

流燈會の光をよ夜の光

十三童光敏

十里西風言訪樓前一瞬墨江秋有

孫迹日暮棹舟向白鷗



文貞公

應需對檜軒堤雨寫

堤雨

流燈會之碑

柳北成島弘撰文

墨之水浩蕩數十里經武總南注於海我東京之地
往昔屬莽蒼德川氏未開府之前數百年墨水之名
業已見於書傳詞句而今人舉東京之勝則先僂指
墨水矣春花之艷秋月之美毋論也納涼乎夏觀雪
於冬遊客之跡四時不斷凡賣酒鬻肉培花種樹之
徒亦多卜居而物之產於此最舊而其名最鳴者都
鳥也元慶中左近衛權中將無相摸守在原業平遊
此地賦都鳥歌世傳為絕唱中將既逝後人欽其風
藻建祠於加茂巖本而祀焉明治十年丁丑實為中

將一千年忌辰墨上須寄村言問亭主人欲為修法
會適有薩隅之亂而不果乃以十一年戊寅七月請
官行流燈會於墨上紙製燈籠形擬都鳥點火中心
其數無慮千百箇夜夜放之水上閃閃隨流而下寔
為竒觀矣往時牛島弘福寺僧每歲孟秋例行流燈
會於此而近世則絕斯舉盖有所據也都鄙士女來
觀者陸續接踵始自七月一日終於八月二十八日
燈日加多而觀客倍衆主人又請三緣山僧侶誦經
舟中大修法會一切費用損貲辦之其尚古追遠之
志洵可嘉也今茲十二年己卯二月主人卜築田園

數畝造一字祀中將以擬巖本祠名其處曰言問岡
將建碑以記流燈之事請余撰文余也昔生於墨之
西瀕今又隱於墨之東岸凡墨之遊事景物一無所
不關也況於平素仰慕中將之文藻而與主人相親
善乎乃不辭謏劣以記顛末主人名佐吉姓外山以
種樹為業世家於墨上其亭曰言問者蓋取於中將
罷鳥歌中之語云

明治十二年己卯三月 桂洲藤信平書

正三位前田齊泰題額 宮龜年鑄

言問祠鎮座式祭文

是乃神床乎巖乃真屋乃稜比清天招奉里鎮女奉留從四位上行右近
衛權中將兼相摸美濃權守在原朝臣業平大人命乃御前尔齋
主權中講義馬場弘介慎美敬比畏美白左汝命往古此乃處尔
至里給比時深久思保須事乃座志詠座留御歌尔因里世尔名多多
留乃所波成奴然波有度御祠母無久御祭仕留事母無乎外山佐吉伊甚
久恐思天此年月朝夕尔勤美津清支赤支真心以天思兼思慮里行
水乃隅田河流乃世古跡乎傳止為天此處乎清久新尔設介築立
天言問岡乃名附前奈池尔杜若佐波尔植並女板橋懸渡志風雅留家
屋乎建天美波志久神床設天恐支御像画書女掛奉天春花乃朝夏波吹

風乃凉敷夕秋波月乃夜冬波雪乃曙乃其時每尔訪比来武人人尔御
 前乎仰支奉浪世刀为天萬乃事止伊太豆支成天志如此事竟尔多故
 是以今年乃七月乃一日乎吉日乃足日乃撰比定天御祭仕布留为天
 獻留御酒御饌海川山野乃種種乃物乎机代刀打積高成天神宮家人
 諸都鳥居群列並鶉成伊這琴勤状乎相字武賀志美相字豆奈比給
 比今後此乃守神刀弥遠永尔鎮里坐天外山佐吉我家乃業弥益尔進
 女志給比富足武事波此堤乃櫻花弥年乃每尔真盛尔立榮尔給比家内
 波八十枉津日乃枉事有浪良世夜乃守里日乃守里幸開給閉八平手母膠毫尔
 柏上天仰支琴美乞禱奉留事乎此河乃五百重敷波平久安久聞食度母
 慎美敬比畏美畏白文明治十二年七月一日

多小一打者
 いろの古影のありしうの
 多くあるもあし
 もあり
 いろのあし
 采由河
 正三位八十孫仲宗引次



應需

松雨長久縮圖

額

小野道風遺墨之模寫

雲湖常刻

板ハ往昔八代將軍德川吉宗公吉野山ノ櫻ヲ移シテ堤上ニ
植レム其一樹ノ内ナルモノ老木トナリ枯タリシヲ伐除ノ際得テ
板トナシ秘藏セシ寺寫村ニ在ル中山某寄附スル所ナリ扉ト
共ニ三枚

扉ノカマナナル船板ハ隅田ノ渡船ニ用ヒシ古物ナリ因ニ依テ
爰ニ用ユ

此ノ額ハ
實業平
之
體貌閑麗放

大日本史曰

在原業平阿保親王第五子也天長中與兄行平共

大日本史曰

在原業平阿保親王第五子也天長中與兄行平共

賜姓在原三代實錄世稱曰在五中將更科日記體貌閑麗放

縱不拘善作和歌三代實錄○按紀貫之序古今和

秀僧喜撰小野小町大友黑主六人而評之後世稱

曰六歌仙源親房古今集序註作六歌撰而其書蓋

係實作仙撰字亦不同六歌仙論者以謂業平歌意

之名未詳始于何時姑附于此論者以謂業平歌意

有餘而言不盡譬諸凋謝之花雖少生色尚有餘薰

古今和歌集序貞觀中任右馬頭奉敕就鴻臚館勞渤海使

人為右近衛權中將元慶中歷兼相摸美濃權守卒

年五十六三代實錄嘗遊武藏至隅田川見水鳥問名曰

都鳥乃悽然作和歌曰、奈仁志於波婆、伊邪古登登
 波牟美夜古杼里、和我於毛布比斗波、阿利也奈志
 也登世傳為絕唱、古今和歌集○按伊勢物語多載
 業平事跡而實錄諸書無所見故
 不後人建祠於加茂巖本、徒然草兼
 載雜談 二子棟梁滋春、
 並善和歌、作者
 部類 滋春人呼曰在次君、皇胤紹運錄
 古今集目錄 著
 大和物語、皇胤紹
 運錄

言問祠神像

画幅繪表具

神詠筆者

正三位綾小路有長卿并自詠

画工

對櫻軒堤雨野澤教信筆

大日本史曰

言問公の記

阿保親王の弟五々人の道樂^{ミツタカ}と、隅田河原を^{ミツタカ}と、
 清くも天の川の^{ミツタカ}と、
 今、百も^{ミツタカ}と、
 月^{ミツタカ}と、
 道樂^{ミツタカ}と、
 一子^{ミツタカ}と、
 て、
 た^{ミツタカ}と、
 道樂^{ミツタカ}と、

おのゝ道樂むまこ道よ。妙川乃道は自然の道はゆるしを
かきつる阿の心なり。よの宿屋よ。常したるまのまを
後共ひり。男たんと。まの世に。まの世に。まの世に。まの世に。
新よの心なり。のまの世に。まの世に。まの世に。まの世に。
神よの心なり。のまの世に。まの世に。まの世に。まの世に。

おのゝ道の 後共ひり 神よの心なり

東海

法樂 俳諧歌

老の身は月をみるも星田川雪見のまの花さけり
すま川よ。のまの世に。まの世に。まの世に。まの世に。
まの世に。まの世に。まの世に。まの世に。まの世に。

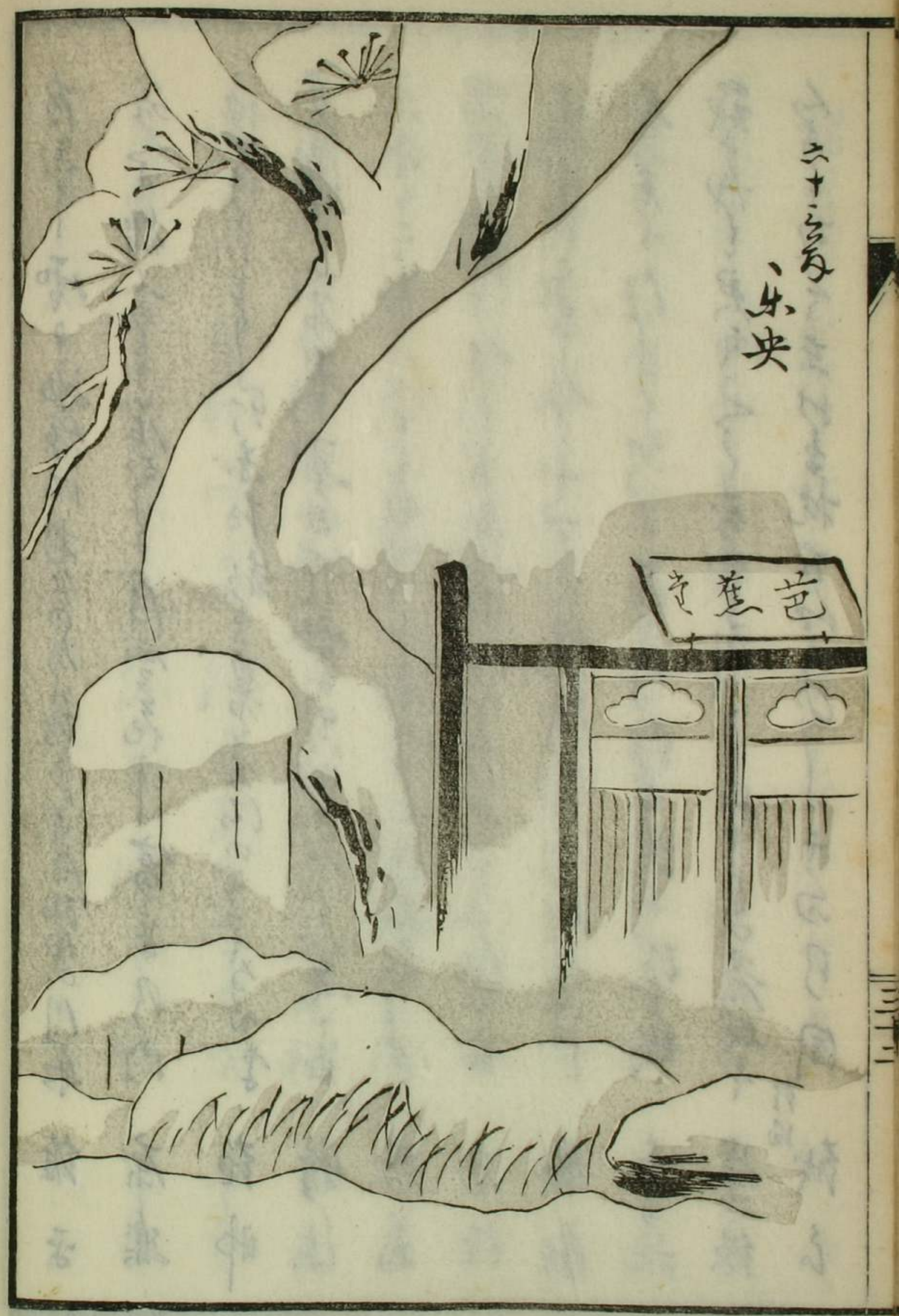
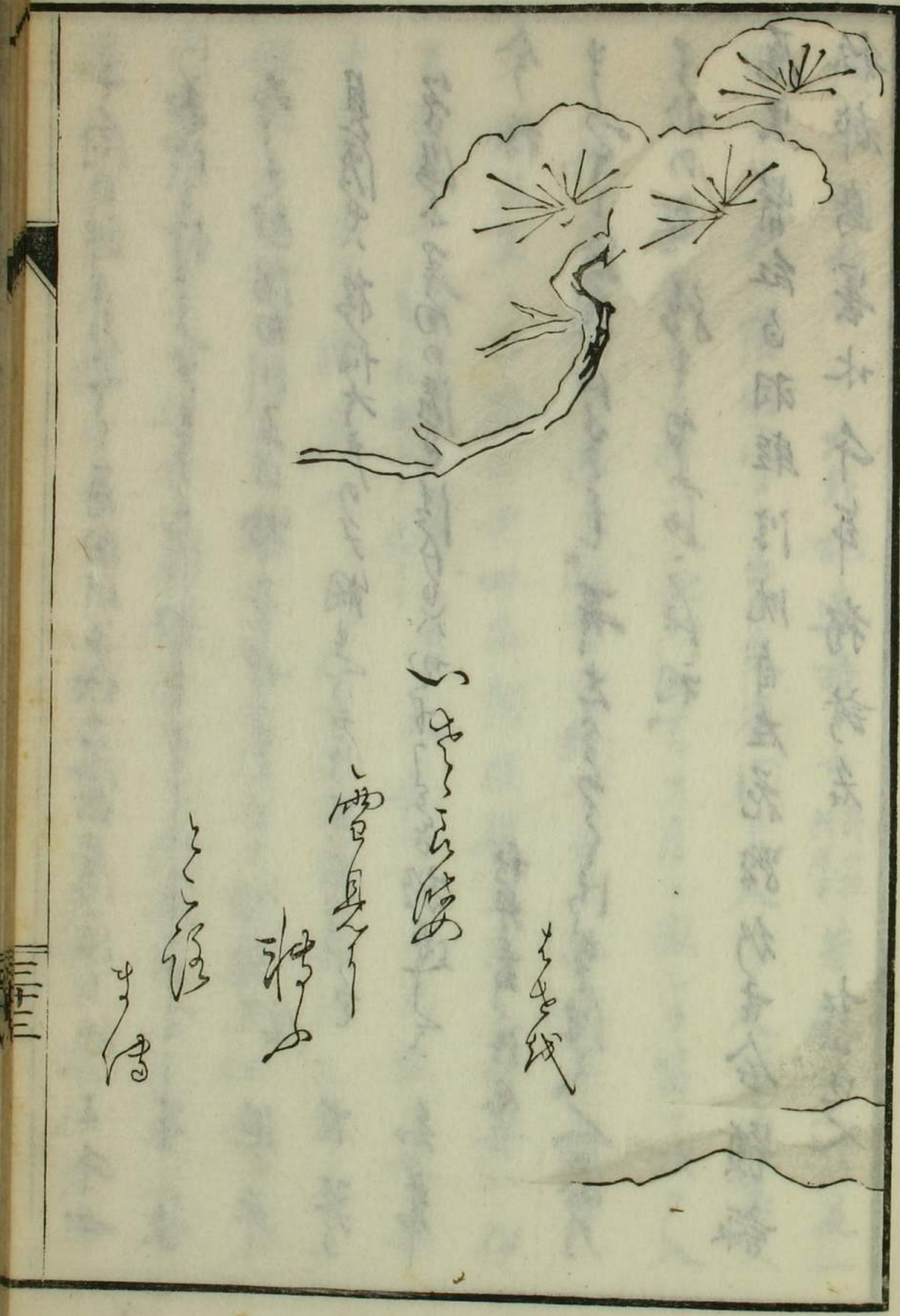
音良

閑まの世に。まの世に。まの世に。まの世に。まの世に。
閑まの世に。まの世に。まの世に。まの世に。まの世に。
閑まの世に。まの世に。まの世に。まの世に。まの世に。
閑まの世に。まの世に。まの世に。まの世に。まの世に。
閑まの世に。まの世に。まの世に。まの世に。まの世に。
閑まの世に。まの世に。まの世に。まの世に。まの世に。
閑まの世に。まの世に。まの世に。まの世に。まの世に。
閑まの世に。まの世に。まの世に。まの世に。まの世に。
閑まの世に。まの世に。まの世に。まの世に。まの世に。
閑まの世に。まの世に。まの世に。まの世に。まの世に。

多枝成

隅田川おぬ海女歌人のし葉の花は錦を白く着
 世を控くまはすも電の都をまは月影を浮むまの葉
 若くは川を渡りてゆく人の涙をまはすも水
 姉とて極く河を知るの歳代を懐物もあや
 其の都をまはす隅田の都島をまはすも水
 若くは川を渡りてゆく人の涙をまはすも水
 隅田川を渡る橋の舟は舟先を渡りてゆく
 隅田川を渡る橋の舟は舟先を渡りてゆく
 隅田川を渡る橋の舟は舟先を渡りてゆく
 隅田川を渡る橋の舟は舟先を渡りてゆく

月影を白く着
 世を控くまはすも電の都をまは月影を浮むまの葉
 若くは川を渡りてゆく人の涙をまはすも水
 姉とて極く河を知るの歳代を懐物もあや
 其の都をまはす隅田の都島をまはすも水
 若くは川を渡りてゆく人の涙をまはすも水
 隅田川を渡る橋の舟は舟先を渡りてゆく
 隅田川を渡る橋の舟は舟先を渡りてゆく
 隅田川を渡る橋の舟は舟先を渡りてゆく
 隅田川を渡る橋の舟は舟先を渡りてゆく



六十二号
、
朱央

芭蕉堂

芭蕉
堂
朱央

之間の神と云々角田河成代の流に及ぶと云
 古長
 延平
 古琴
 知華
 今様
 新野高経依
 尾黒紫紅白羽輕浮沈自在花踏行古今願詠
 祢都島墨水千年獨誇名
 松山匠人

續教訓抄曰 大外記遠語テ云 師任孫 師平子 昔殿上人月夜一
 回シテ步行不陽明門ヨリ出テ朱雀門ヨリ入リ人皆内裏へ
 参リテ後業平中將一人此門トナルヲ月ニ感シテ笛ヲ吹テ入
 ナリ樓上ノ鬼大ニ感テ此笛ヲ給ヘト云リ此業平朝臣ハ
 平城天皇ノ孫彈正孝四品阿保親王第五男母ハ伊
 豆内親王 桓武天皇第七女兼子内親王 卜号不柱親王トハ是ナリ 天長二年乙巳生ル承和
 十四年正月補藏人 年廿三 任右近將監嘉祥三年正月
 叙従五位下 年廿六 貞觀四年三月七日叙従五位上 年廿八
 同五年二月十日任左近衛權佐 年廿九 同六年三月廿八日
 遷任右近衛權中將 年四十 同七年三月九日遷任右馬

頭 年四一 同十五年正月七日叙從四位下 年四九 元慶元年
正月十一日兼任相模權守 年五三 同三年十月補藏人
頭 年五五 同四年正月十一日兼任美濃守 年五十六 同年五
月廿八日卒

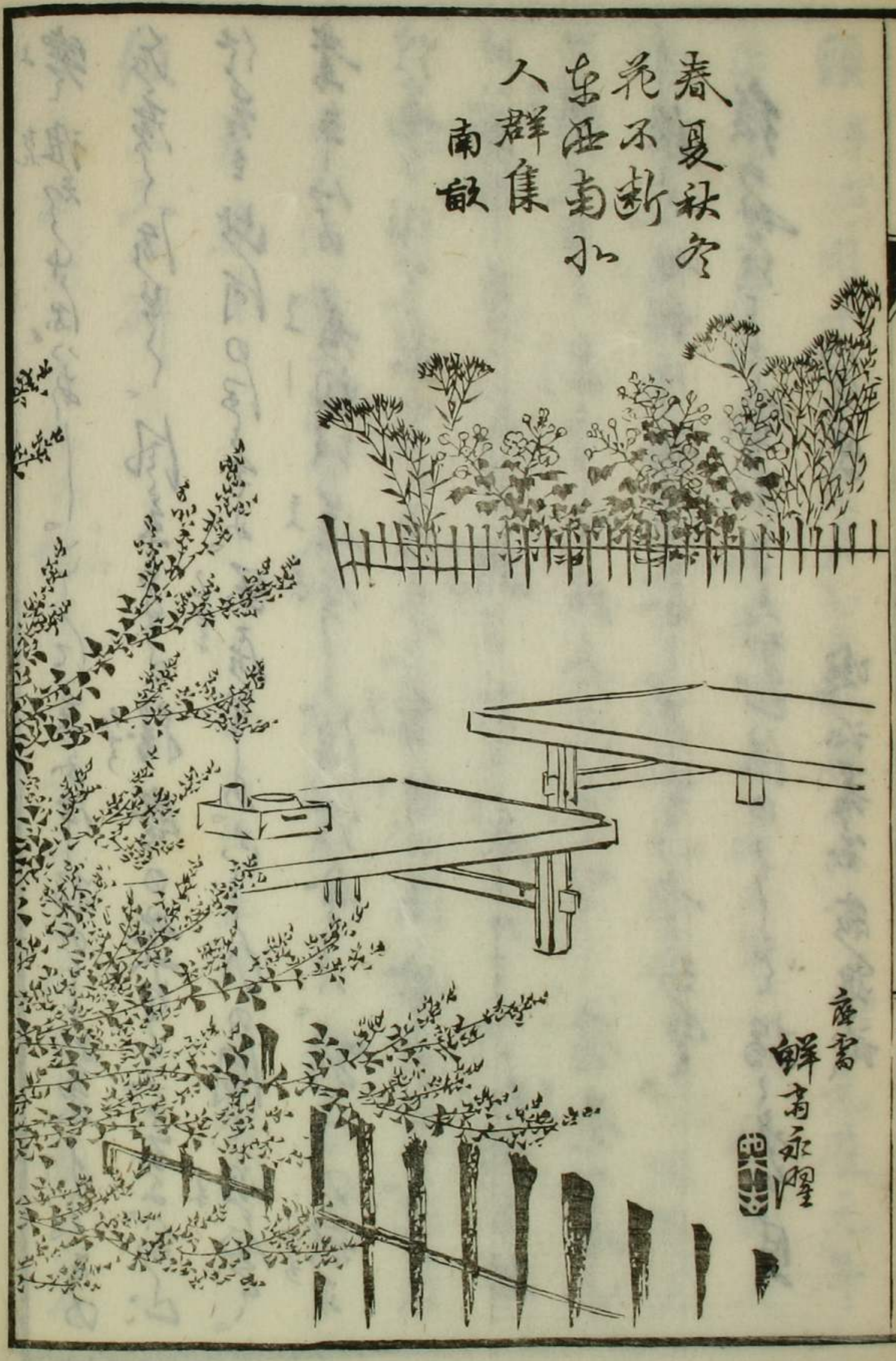
明治十二年一千九百零一年陽田川の邊りに今度
祠を新造管内りて七月一日祭典執行乃間
正三位後小路有長守合奏りて西之曲哉
奉樂也 正九位山井景順

假名之の碑

於武冠下流の境に流す寸頃多川ハ東國の石

實祖知^上の流あり。こゝに在る中村の石は系より。その
石流く流る。風景もまた掃^{あやう}野の空なり。さるる所
住居に此河の石あり。其居を^ん出^るて川の周^しり
當年今の春初に造^る流^の地^の會^のハ。形^の形^の
地^のを^の作^る。数^のあり^の流^のあり。魚^の住^のの法^の會^のと^の世^のに^の見^の来^の
由^のハ^の先^のり^の本^のを^の造^る。碑^の子^のく^の。慈^のに^のま^の。和^の約^のの碑^の
子^の備^の。子^の高^のら^のを^の梅^の舟^ののい^のま^のか^の。膏^の毫^のを^の墨^の水^の
に^の流^のる。地^のの^の流^のる。志^の高^のら^のを^のあ^のり。
後の母^の流^のる。志^の高^のら^のを^のあ^のり。法^のの^のま^の。志^の高^のら^のを^のあ^のり。志^の高^のら^のを^のあ^のり。

千史 凝魂養室寂想滅



春
 夏
 秋
 冬
 花
 不
 断
 如
 在
 南
 北
 人
 群
 集
 南
 畝

三十五
 解
 南
 永
 隆

慶永

發信の

やまを踏ま

らんらん

ささた川ら

むねま

三



三

俳句

三月月やとち一流ふすまの川 唐吉女

海陸の新慕りし 陸奥の村 旦新

海に似る船も 河津 秋と 壽外

舟に似る船も 河津 秋と 壽外

人乃居ぬ 谷時多の 陽田川 解志

名月や 塚の 新 澄むすまの河 賢 瓢

三



無端停棹寺門前
 試唱王孫都鳥篇
 風力未蘓芳草綠
 春光只在柳條邊

花城先生詩 夢達子



萬壽同文
 長壽無疆
 進如

六歌仙より燈籠

六歌仙の内。遍照法師の歌。中にて柳とては画柳と
ありて。その名を我に。

借用証

一金玉と評歌

一首

但柳はそらの鶴と

右に南の哥仙連年燈籠入用を徳教合より風と

借用申す可き通照法師。期限ありて。如本名は通照

可申。たゞ一雲法師通照法師より志づるも。我は

欺くつらり。等々。我は借し。人子。我は借し。手

次中居諾証張く思徳のこと。

明治十一年七月

小倉百人町六丁目

通照

素性法師殿

假名淡彩園 七月廿日

此亦自ら。墨痕言乃同。七人六方の圓り。地を装へ。

表の飾。六歌仙の柳。手忘。中ハ元禄踊の新繪。風を

吹く。柳。白海乃馬。細工。歌。二羽の割書。

表の風雅の六歌仙

童戲真似自轉車

裏の酒落の元禄踊

この鐘花子、新富彦は紅葉の橋の夢頃を懐ひ。柏子も合々
おぼしめ強向だしの夢を、何れも好事家の儲蓄を知らん。

紅葉の橋乃夢頃

善田の川は夜景色を映流を燈りの橋を如一寸も都
を透るるのりつゝあやしく。誰かほくかを深くある。風
めくも小車如。ヨイソクとあやさ。

東京新字 七月廿日

是の如何あも。面を背に抱ひ。事にも。正徳の方先
出来て居る。其後をさるも由意あるに。能周法所が為也
月十紙。其の如く。白河の関。

とらみ漢新聞 七月廿日

風流の掛い。温古の樂。世藝に離る。雅致を重んず。ハ
此上も何れ優る。こゝに於て。善水言向の星の廻り。終
表のうら歌仙。新し。手画の内。通所乃。身活共の哥。紙
へ。正徳子。たの通。新を。掲げら。是等。世に。不
あや。其の。高名。寔子。お。遊。ひ。で。あ。り。ま。す。

第七回教紙

善水も流燈をゆひ。起す。高も人も世を。善の命
月に古橋。或は。命を。お。さ。ま。と。あ。り。ま。す。

かへぬ孫子おひさし 其處吾尔方七國の屋敷舎を保ち
七つ懐田乃々ぬ神を系月子けて 某日より之夜さのほつ
後世の味樂の多向子生あなをいさうにんまん 幸進の雅天
来舎を給りハ地多に翁も満をたんと孝事誠學出
あへに代りて 園も田も梅の里ちつき 花候節 諸事遂不

春地歌占寶乃種 由來

柝言同相 所保親王才五の侍子母海舟ハ氣子内親王とて
父母も皇統も近てす 侍も在系の業平朝臣を定むべき
吾子参る 往昔此處より 初冬の御奇はあれハあり 奉田河

乃佳景春枝も云は 来遊世人 温古の志守り又後くまをその
名柄きんせ 故子是の土本を今春より 只いおう 僕ある夜夢
衣冠正しく 湯たけある いかんこなたき神のあはれ 汝は道哉
系多事一のあつきこをうとれ 今より此冬も 訪来くいの者
此處に 幸福を祈え 特々 法磨の秀逸 名譽を 得へよと
あまの 男女乃 良縁を 得せハ 近く 求むを 祈り 法入系
亦と 敬を 文んこし 又 孫を 祈せハ 歌占の 古事 には 祈り せよ
のり 祈い かな 祈り せよ 祈り せよ 夢ハ 覚れ 実也 此は 神
ハ 祈り せよ 祈り せよ 祈り せよ 祈り せよ 祈り せよ 祈り せよ
は 祈り せよ 祈り せよ 祈り せよ 祈り せよ 祈り せよ 祈り せよ



一簇香雲翳水汀
 湫艷紅波奪波青
 看櫻之地何邊好
 長命寺前言問亭
 西京華岳



名物
 こいさ子

其の愛敬あまの河原、思ひやあやふし、主人我も留まら幸福
 せ望まふあひのり、後、一年はるり、一月ありと云へば
 来る一月、百り、百の周、神の初まを色、初まを言ふを
 その年、古語を名を、事を知ん、我のそあ、如く人、ハ
 目を、何やま、に、多、何、是を、室の、種、云、の、種、
 前、多、云、第、故、物、後、の、事、成、た、り、中、屋、人、の
 信、中、神、の、威、を、ま、事、あり、永、く、以、神、の、維、持、修、持、を、固、
 名、言、く、學、へ、由、く、水、の、来、世、ま、修、り、ん、る、を、教、ふ。

墨水流燈會記

墨隄植櫻之碑 梁川榎本武揚篆額
 墨水其源出于秩父郡木賊谷合細流為荒川
 蜿蜒注九郡末會綾瀨而始得斯名矣古晉東
 海之驛道以水界武總在五中將寄懷乎渡口
 白鷗詠曰國詩所謂都鳥之篇是也自德川氏
 建霸府地屬射獵之園其隄經隅田寺島須崎
 小梅四村至枕橋長二千一百間餘木曰葛西
 陂俗稱大隄嘗置行殿於木母寺以寺北關屋
 里為游覽之場嚴有公擇櫻種於常州櫻川植
 之隄上蓋偕樂之遠慮而植櫻之權輿也享保

二年有德公又藝一百株於隄上及寺南古道
十一年植櫻桃柳各百五十木榜示以禁剪伐
且分種其萌蘖令勿廢絕歲給金若干永錢若
干以充培植看護之資隅田村里正阪田氏世
掌之亦見公保護祖宗遺愛之一端焉而當時
所植以隅田為限矣寬政以降世運極盛闔鄉
之農以種樹為業故其工寢資民力文化中寺
島花戶佐原菊隲與淺川默翁謀藝重瓣櫻百
五十本於白髭祠南北天保二年阪田三七郎
分種二百餘株於寺島須崎小梅三村安政元

年又補二百株由是列植始連三圍祠上弘化
三年罹水患櫻樹大損須崎花戶宇田川總兵
衛以獨力藝其村疆者百五十株長命寺畔合
拱交陰者即是也明治維新之七年小梅村人
晉永機合衆力以藝其村疆十三年舊水戶藩
知事德川氏種其邸前至是列植遂達枕橋十
四年寺島村人又補其闕而維新後之工不殖
其半或因栽插不得候耶凡花之性難保久且
因境土之閒劇厚薄而有壽夭之別隄上無林
丘擁護而接壤闡闡當鄉路之衝平時來往之

絡繹風日沙塵之觸擊根幹為受其害與夫山
陬幽蹊全其天者迥異以故櫻之受年大抵與
人壽齊至重辦則又半單辦苟藝植之不繼焉
有數而歸盡矣大倉喜八郎築居隄外裴回顧
瞻有所興感乃語成島柳北曰隄櫻是居民所
賴以為命者舊植既盡新栽亦不多殖傷萎者
摧折者或遺蘖或枯朽者比比有之不豫程補
植之工則後必損勝區之譽某不敏敢當其任
願與先生謀之柳北曰噫美矣哉此舉請子督
其工我則募同志先是墨上同人結一社詩酒

徵逐命曰白鷗社大倉成島二氏卽其社友也
於是告同社暨鄉黨諸人衆僉躍然應之南葛
飾郡長伊志田友方申之府知事而樹藝亟就
功其度長隄而栽培者計一千株時十六年冬
十月也吾寄老墨上每值花時冠蓋相望游屐
累至都人士女絃絃醉歌驩譁舞水隈為震
顧視木母寺行殿之址豐草芊綿不詳其所而
櫻樹之培植逐年而益盛永傳甘棠之遺芳與
芳野嵐山並名遂為 帝京苑囿之域中將之
詠蓋為之地耶抑亦花之榮也哉曩柳北欲勒

高麗城を築き一國を補ふ其年の八月一日に成りし事ありては
 其の年秋後を養ふ事難きなりと冬之風俗の志ありて是ハ
 密者佳味あり人々大に嘗て其の道儀を命まじに 既又其の道人を
 城の南極を築ひ旦夕に城をむく日と居居るに能ひぬ其日
 翁も少くとも其五年中其の古跡をたゞしめて之を周園子と名附
 不ハ何とて昔條の者板を書く事ありて一層平儀を
 傳へ日百ありて警子ありぬ人々此後地を林の間に於て乃
 人少く何そ人を誘ふの者ありて也と其の向ふ處に牛馬の跡あり
 中地ありて之よりありし久く流る人々知事ありて是ハ其後川一
 其跡ありしに後より其の跡を指し其の景況を辨ぬあり

今以月に於て其地を養ふ事難きなりと冬之風俗の志ありて是ハ
 其の年秋後を養ふ事難きなりと冬之風俗の志ありて是ハ
 密者佳味あり人々大に嘗て其の道儀を命まじに 既又其の道人を
 城の南極を築ひ旦夕に城をむく日と居居るに能ひぬ其日
 翁も少くとも其五年中其の古跡をたゞしめて之を周園子と名附
 不ハ何とて昔條の者板を書く事ありて一層平儀を
 傳へ日百ありて警子ありぬ人々此後地を林の間に於て乃
 人少く何そ人を誘ふの者ありて也と其の向ふ處に牛馬の跡あり
 中地ありて之よりありし久く流る人々知事ありて是ハ其後川一
 其跡ありしに後より其の跡を指し其の景況を辨ぬあり

統制日ハ有國子以テ運糧を以テ水田ハ新集定ルル所ニ
 備置不効ナリ乃チ今此等之類ノ所ニ以テ墾田ノ耕地を
 増ク之向ノ思ハ右等一基ノ紀念碑を以テ中村ノ祠を以
 テ開田ノ長久ク保テ置ルル事ヲ以テ人々ノ注意を以テ之
 有リテ今ノ世ノ年毎を以テ今年ノ老人ノ一國年忘ル
 存ル世ノことク流體を以テ而シテ以テ流體會ノ際ノ事ヲ以
 テ為シテ一少冊子ヲ刊行流體誌名ヲ以テ之ルル事ヲ以テ
 其ノ所ニ在ルノ西仙等々ヲ以テ之ルル事ヲ以テ之ルル事
 業也ト云フ事ヲ以テ之ルル事ヲ以テ之ルル事ヲ以テ之ルル
 明治二十年三月二十五日 御届濟
 同年 七月 日出 版
 花咲若那 国首

明治二十年三月二十五日 御届濟
 同年 七月 日出 版

出版人 平民

外山新七

東京府南葛飾郡
 須崎村十七番地

編輯人

中村知常

同 郡中之郷村
 百六番地身留



